

第1006回サントリー定期シリーズ

10月17日(木) 19:00開演 サントリーホール

第165東京オペラシティ定期シリーズ

10月18日(金) 19:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

第1007回オーチャード定期演奏会

10月20日(日) 15:00開演 Bunkamura オーチャードホール

10/17

10/18

10/20

指揮：出口大地

ヴァイオリン：服部百音*

コンサートマスター：三浦章宏

ハチャトゥリアン：『ヴァレンシアの寡婦』組曲より(約11分)

1. イントロダクション 3. 歌 6. ダンス

ファジル・サイ：ヴァイオリン協奏曲『ハーレムの千一夜』Op. 25* (約25分)

I. アレグロ II. アレグロ・アッサイ III. アンダンティーノ
IV. [テンポ指定なし] — コーダ(アンダンティーノ)

— 休憩(約15分) —

コダーイ：ガランタ舞曲(約15分)

コダーイ：ハンガリー民謡『孔雀は飛んだ』による変奏曲(約25分)

主題 モデラート	第9変奏
第1変奏 コン・プリオ	第10変奏 モルト・ヴィーヴォ
第2変奏	第11変奏 アンダンテ エスプレッシブヴォ
第3変奏 ピウ・モッソ	第12変奏 アダージョ
第4変奏 ポーコ・カルマート	第13変奏 葬送行進曲
第5変奏 アパッショナート	第14変奏 アンダンテ、ポーコ・ルバート
第6変奏 テンポ(カルマート)	第15変奏 アレグロ・ジョコーソ
第7変奏 ヴィーヴォ	第16変奏 マエストロソ フィナーレ ヴィヴァーチェ
第8変奏 ピウ・ヴィーヴォ	フィナーレ ヴィヴァーチェ

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団

共催：公益財団法人 東京オペラシティ文化財団(10/18)

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

協力：Bunkamura(10/20)



♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。

♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフのご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。

♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。

♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。

♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール



©hiro.pberg_berlin

指揮

出口大地

Daichi Deguchi, conductor

10/17

10/18

10/20

第17回ハチャトゥリアン国際コンクール指揮部門にて日本人初の優勝。クーセヴィツキー国際指揮者コンクール最高位及びオーケストラ特別賞。2021年にはベルリン放送交響楽団の公演にてヴラディーミル・ユロフスキ氏のアシスタントを務める。

ベルリン・コンツェルトハウス管弦楽団、アルメニア国立交響楽団等の指揮を経て、2022年7月、東京フィルハーモニー交響楽団定期演奏会にて日本デビューを飾る。その後京都市響、読売日本響、仙台フィル、日本センチュリー響、群馬響、神戸室内管、新日本フィル、東京都響、兵庫芸術文化センター管、大阪フィル、東京響、神奈川フィル、大阪響と立て続けに共演し、今後も日本各地のオーケストラへのデビューが決定している。2024年9月からの1年間、リエージュ王立フィルハーモニー管弦楽団のアシスタントコンダクターに選任された。

大阪府豊中市生まれ。関西学院大学法学部卒業後、東京音楽大学作曲指揮専攻(指揮)卒業。2023年3月ハンスアイスラー音楽大学ベルリンオーケストラ指揮科修士課程修了。指揮を広上淳一、田代俊文、三河正典、下野竜也、クリスティアン・エーヴァルト、オペラ指揮をハンス・ディーター・バウムの各氏に師事。またネーメ、パーヴォ、クリスティアン・ヤルヴィ、ドナルド・ラニクルズ、ヨハネス・シュレーフリ、井上道義、沼尻竜典各氏らのマスタークラスにオーディションを経て招待され、薫陶を受ける。

公式ホームページ <https://daichideguchi.wixsite.com/daichideguchi>

10/17

10/18

10/20



©YUJI HORI

ヴァイオリン

服部百音

Moné Hattori, violin

1999年生まれ。8歳でオーケストラと共演。10歳以降様々な国際コンクールで優勝やグランプリを受賞し、イタリアでのリサイタルを皮切りに国内外で演奏活動始める。V・アシュケナージとスイス、イタリア公演。ハチャトゥリアン音楽祭、トランス・シベリアン音楽祭などにも参加。2020年にはフランツ・リストチェンバーオーケストラとドイツツアーを行うがコロナ禍で帰国。国内ではN響、都響、東京フィル、日本フィル、読響、新日本フィル他数々の著名オーケストラ、指揮者と共演を重ねている。2021年にはNHK交響楽団、バーヴォ・ヤルヴィとの共演や翌年のドイツ・カンマーフィルとの共演も大好評を博す。2022年から自身の企画でのコンサート「STORIA」を展開し2024年にはNHK交響楽団、井上道義氏と一晩でショスタコーヴィチの2つのヴァイオリン協奏曲を演奏するという驚異の企画で大成功をおさめた。また日本ではあまり演奏されない名曲の普及にも意欲的に取り組みファジル・サイのソナタの日本初演なども行った。使用楽器は日本ヴァイオリンより特別貸与のゲルネリ・デル・ジェス。

楽曲紹介

解説=小室敬幸

民族性を強く反映したクラシック音楽について、19世紀後半は「国民楽派」、20世紀前半は「民族主義」に括られることが多いのだが、実は日本独自の区別に過ぎず、どちらも「音楽におけるナショナリズム(愛国主義)」のあらわれに過ぎない。

言うまでもなく愛国心は、他民族に対する攻撃・排除と結びついてしまうと人類規模の悲劇をうむ。けれども愛国心なしでも、それぞれの分野ごとに影響力の強い国の文化に従属して飲み込まれてしまう。本日演奏されるようなアルメニア、トルコ、ハンガリーの音楽を—— たとえJ.S. バッハやベートーヴェンと比べたとしても!—— 軽んじないことは、現代社会において多様性(ダイバーシティ)を重視することと一緒なのである。

ハチャトゥリアン 『ヴァレンシアの寡婦』組曲より

生前はソ連、現在はアルメニアの作曲家として紹介されることの多いアラム・ハチャトゥリアン(1903-1978)だが、両親の出身地は現在アゼルバイジャンであり、彼が生まれたティフリス(現:トビリシ)も現在はジョージア(旧:グルジア)の首都だ。当地では各国の文化が入り乱れていたという。アルメニアは1920年にソ連の前身に併合され、ハチャトゥリアンはその翌年にモスクワへ移り住んだ。グネーシン音楽大学とモスクワ音楽院で学び、作曲はミヤスコフスキー(プロコフィエフの親友)に師事。学生時代からアルメニア民謡を作品に取り入れることで頭角をあらわし、1936年に大学院を修了している。

演奏機会の多いピアノ協奏曲(1936)、ヴァイオリン協奏曲(1940)、バレエ『ガイーンズ』組曲(1943)はいずれも前半生の作品で、演劇の伴奏音楽として作曲された『ヴァレンシアの寡婦』(1940)もこの頃にかかれた。原作はスペインのロペ・デ・ベガ(1562-1635)による1620年に出版された戯曲。夫を亡くしたレオナルダにオットーとヴァレリオという2人の男が迫るが、レオナルダは自分が惹かれたカミロと結ばれるという喜劇だ。1952年に編み直された組曲から本日は3曲抜粋される。

第1曲「イントロダクション」は三部形式(A-B-A')。勇ましくも喜劇らしい主部Aに挟まれた中間部Bでは愛らしい旋律が繰り返される(ただし、ロリス・チェクナヴォリアン指揮 アルメニア・フィルの録音では主部が再現されずにコードに突入する)。**第3曲「歌」**は、バレエのパ・ド・ドゥのような音楽。最初にクラリネットが吹く夢見のようなメロディが、繰り返されて盛り上がっていく。**第6曲「ダンス」**は五部形式(A-B-A'-B'-A")。ひと節のなかに短調と長調が乱れる旋律Aと、繰り返されるたびに姿を変える旋律Bが交互に入れ替わって熱狂へと導いていく。

【作曲年代】1952年 【初演(劇付随音楽)】1940年11月14日、モスクワにて

【楽器編成】フルート2(ピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、トライアングル、シンバル、グロッケンシュピール、カステネット、ウッドブロック、シロフォン)、チェレスタ、ハープ、弦楽5部

ファジル・サイ ヴァイオリン協奏曲『ハーレムの千一夜』Op. 25

アルメニアの西隣に位置するトルコで生まれたファジル・サイ(1970-)は現代を代表するコンポーザー=ピアニストで、特に『トルコ行進曲ジャズ Alla Turca Jazz』(1993)が有名だろう。ただし中核をなすのは母国の伝統を取り入れた音楽。そんな作品のひとつ、ヴァイオリンとピアノのためのソナタ Op. 7(1997)で見事な演奏を聴かせたヴァイオリニストのパトリツィア・コパチンスカヤ(黒海を挟んでトルコの北に位置するモルドヴァ出身)のために作曲されたのがこの協奏曲だ。

『千一夜(物語)』といえば、シェヘラザードという女性が「ハーレム(日本でいえば江戸城の“大奥”のような原則男子禁制の住まい)」に入り、女性不信に陥ってしまった王に殺されぬよう摩訶不思議な物語を毎晩披露する……という物語。実はこの王が治めるイラン帝国サーサーン朝は、現在のトルコやアルメニアも支配にしていたのである。本作はリムスキー=コルサコフのように物語を表現し

たのではなく、当時のハーレムの雰囲気空想して自由に描いているようだ。切れ目なく続く全4楽章で構成される。

第1楽章ではハーレムに住む様々な女性たちが描かれる。トルコなどで伝統的に使われてきた「クデウム Kudüm」という打楽器に導かれて登場するヴァイオリン独奏が、ハーレムのなかを案内してくれているかのようだ。楽章終わりには「ベンディール Bendir」という鈴のないタンバリンのような打楽器と共に奏されるヴァイオリンの短いカデンツァを経て、**第2楽章**に突入。タンバリンと胴の長い太鼓「ダラブッカ Darbouka」によるリズムに乗って、狂乱のダンスが繰り広げられる宴の一夜がはじまる。まるで夜の空が白んでいくような静かなカデンツァを経て、宴の翌朝を描いた**第3楽章**へ。妖しげな前奏のあと、ハープ等の伴奏にのってトルコの有名な民謡「キヤーティビム Kâtibim」が奏でられていく。別のメロディを挟んで、最後はまた民謡が戻ってくるが散り散りになっていき、再びクデウムのリズムに導かれて**第4楽章**に。第1楽章のメロディが回帰するが、タンバリンが登場してからはトルコの伝統的な9拍子（ジャズの有名曲「トルコ風ブルー・ロンド」で使われたリズム）が主導権を握る。

【作曲年代】2007年 【初演】2008年2月20日、ルツェルンにてジョン・アクセルロッドの指揮、パトリツィア・コパチンスカヤの独奏による

【楽器編成】ピッコロ、フルート2、オーボエ、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン、チューバ、打楽器（タンブリン、小太鼓、大太鼓、ロート・タム、ウィンド・チャイム、サスペンド・シンバル、ウッドブロック、ヴィブラフォン、マリンバ、クデウム、ベンディール、ダラブッカ）、チェレスタ、ハープ、弦楽5部

コダーイ ガランタ舞曲

オーストリアの南東に位置するハンガリーで生まれ育ったゾルターン・コダーイ(1882-1967)は、作曲家としてのみならず、音楽教育者、そして民謡の研究者として多大な業績を遺している。彼の影響を受けて民謡を研究するようになった同郷のバルトークが周辺の国々まで採集に赴き、有名な「ルーマニア民俗舞曲集」のような作品を書いたのに対し、コダーイは原則としてハンガリー国内に研究対象を絞って、自作にその要素を取り入れた。

『ガランタ組曲』(1933)は、ブタペスト・フィルハーモニー協会の設立80周年を記念して委嘱された。作曲者が2～9歳にかけて過ごしたガランタ(1918年までハンガリーの領内で、現在はスロヴァキアの都市)の名を冠した『ガランタのジプシーたちによるハンガリー民族舞曲集』(1903)に掲載された楽譜をもとにして、当時消えつつあった古いスタイルのジプシー音楽——チャールダーシュではなく、その原型となったヴェルブンコシュ(兵隊集めを起源にもつ舞曲)——を発展的に蘇らせようとした作品だ。ゆったりとした序奏を締めくくる技巧的なフレーズに続いてクラリネットが吹くのが、全曲を統べる主題(ラッシュューと呼ばれる遅い部分)で、この主題が何度も繰り返し登場するあいだに、多彩な舞曲(フリッシュと呼ばれる速い部分)が挟み込まれていく。

[作曲年代] 1933年 [初演] 1933年10月23日、ドホナーニ・エルネーの指揮による

[楽器編成] フルート2(2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、打楽器(小太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール)、弦楽5部

コダーイ ハンガリー民謡『孔雀は飛んだ』による変奏曲

ハンガリー民謡『孔雀は飛んだ』による変奏曲(1937-1939)は、アムステルダム・コンサートヘボウ管弦楽団の創立50周年を記念して委嘱された。この民謡では捕らわれた捕虜の解放が歌われており、ナチス・ドイツにすり寄っていった当時のハンガリー王国に対する抗議を込めてコダーイは題材に選んだようだ。

楽譜上には第1～16変奏、フィナーレという表記があり、第1変奏の前を主題(最初は低弦が提示し始める)と捉えると18のセクションに分けられる。それらをいくつかの変奏ごとにまとめ直すと、「ソナタ形式」あるいは「4楽章構成」に見立てられるのではないかという研究がなされてきた。

筆者が妥当だと思うのは後者で、[第1楽章]に相当するのが主題(≒序奏)と第1～6変奏、[スケルツォ]が第7～10変奏(遅くなる第9変奏は中間部)、[緩徐楽章]が第11～14変奏、[終楽章]が第15～16変奏とフィナーレ(ここで主題が長調になって再現される!) ……という見立てが可能だ。

【作曲年代】1939年 【初演】1939年11月23日、ウィレム・メンゲルベルクの指揮による
【楽器編成】フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2(2番はコーラングレ持ち替え)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、打楽器(トライアングル、シンバル、グロッケンシュピール)、ハープ、弦楽5部

こむろ・たかゆき／東京音楽大学で作曲を学んだ後、同大学院では音楽学を専攻。修了後は大学の助手と非常勤講師を経て、現在は音楽ライター。クラシック音楽、現代音楽、ジャズ、映画音楽を中心に演奏会やCDの曲目解説、雑誌やWEBメディアにインタビュー記事を執筆。また、現在進行形のジャズを紹介するMOOK『Jazz The New Chapter』にも寄稿している。共著に『聴かすぞういのための吹奏楽入門』『commons: schola〈音楽の学校〉vol.18 ピアノへの旅』。